



特集「欧州の環境戦略—EUはなぜ環境に熱心になったのか？」 の編集にあたって

「EUは環境先進地域である」、「日本もEUを見習うべきだ」、さらには、「日本の環境対策技術はすぐれているのだからEUの後塵を拝していないでイニシアティブをとるべきだ」という声が聞こえてくる。その背景には、

- (1) 地球環境問題に対する国際的立場において、EUとこれまでのブッシュ政権によるアメリカの方向性が大きく異なっていたため、積極的な環境戦略を打ち出すEUが、地球環境問題対策のイニシアティブを取ろうとしているようにうかがえる。
- (2) EU発のRoHS, REACH規制やISOによる国際標準化により国際経済の動向にも大きな影響を及ぼしている。
- (3) 欧州が世界の環境施策をリードしている報道が多く、また北欧諸国などのライフスタイルがエコロジカルなものとの認識もあり、EU＝環境先進地域とイメージされるようになっている。
- (4) EUの環境戦略には国際的・経済的イニシアティブを得ようとするものと純粋にサステナブルデベロップメントをめざしているものが渾然一体となっていると思われる。

という事情がある。

しかし、EUの環境戦略が実際に「すぐれている」、「先進的である」としても、本当にEUの環境戦略のねらいが、純粋に環境優先で持続可能な社会形成をめざしているのか、また実際にその環境戦略が機能し、効果を発揮しているのかについての情報は少ない。

日本がEUの環境戦略を見習うにしても、別方向でイニシアティブをとろうとするにしても、EU環境戦略の実態とその効果を分析することは不可欠である。そこで、本特集ではEUの環境戦略の分析の端緒として、現在のEUの環境戦略の形成過程を整理し、なぜEUが環境施策に熱心になったのかを把握することを目的とする。

まず、巻頭言では、田中俊郎氏に「EUの環境戦略」について包括的なお言葉をいただいた。つづいて、①EU環境戦略の成り立ちと発展の観点から、柳 憲一郎氏にEUの環境法政策の成り立ちとその後の展開について解説いただいた。和達容子氏からは、EU環境施策に対する加盟各国の意識、温度差などを乗り越えて、意志決定が迅速におこなえる仕組みとその背景を整理していただいた。また、スイス在住の大野 慶氏には、欧州の環境施策の市民生活への浸透状況について、ジュネーブから現状報告を執筆いただいた。

つづいて、②EU環境施策の国際戦略という観点からは、竹内敬二氏より、ジャーナリストとしての視点を通して、EUが担っている役割、戦略、背景等について考察いただいた。また、エネルギー・気候変動問題に関しては、藤原範子氏からは、エネルギー気候変動パッケージならびにその政策手段としてのEU-ETSに着目して、EUの温暖化対策を体系的に整理していただき、田中良典氏にはEU気候変動政策パッケージについて詳細な解説をいただいた。最後に、上田純子氏には、EU発のRoHS, REACH規制等の環境法規制が世界に及ぼす意義について考察いただいた。

なお、今号ではEU環境戦略の形成過程と現状の概観にとどめたが、EUの環境施策別、地域別等の環境戦略や現状の課題等のより具体的な事項について、今後継続的に情報収集をおこなってきたい。

(編集委員会)